

## 「ケガと弁当は自分持ち」 子どもたちが生き物に戻れる場所

雑木林の面影が残る公園の一角が、毎週火、水、木曜日、子どもたちが“生きもの”に戻れる場所になる。子どもたちは土を掘ったり、木登りしたり、バケツで水を汲んで川の流れをつくったり、ロープでブランコをつくったり、秘密基地をつくったり。どんどん遊びを広げていく。大人と一緒に火を使って料理をつくることもある。

“プレイパーク”と名付けられたこの一角は、地域の中で子どもたちがのびのびと遊び育つ場を作っていきたいと願うお母さんたちが作った。

「ケガと弁当は自分持ち。自分の責任で自由に遊ぶ」が約束ごと。

今から20年前、橋本さんたち子育て仲間は、子どもと一緒に雑木林で一日中遊んだ。親子が自分たちの木を決めて名前を付けた。季節とともに芽吹き、葉を茂らせ、紅葉して散っていく姿を見守った。蔓を取って大縄跳びをした。ドラム缶で火を焚いて持ち寄った野菜を大鍋で煮て食べた。子どもたちは野山を駆け巡り、大人も夢中で遊び、そして育った。



橋本さん(右)とプレイリーダー“やんちゃ”さん。

橋本ミチ子 ◆NPO法人「横浜にプレイパークを創ろうネットワーク」理事長。1948年福島県生まれ。川崎市で母親クラブ活動の後、横浜市にてお母さんの手作り保育や育児サークル立ち上げ、保育ボランティア育成等を手がける。1994年よりプレイパーク普及活動始める。



子どもが大きくなっても、若いお母さんたちを巻き込んで一緒に遊びを続けている。

橋本さんたちは“プレイリーダー”役を買って出て、子どもたちが「何だろう」「やってみたい」と思うきっかけづくりをする。

今の子どもの多くは“火”を使ったことがない。まず、子どもたちに薪を集めてきてと頼む。子どもたちは思い思いに燃えそうな物を集めてくる。枯れ枝や落ち葉、生木に青々とした葉っぱ。橋本さんは「マッチで火をつけられる子いる？」と尋ねる。「オレできる」「オレなんて超得意」。一人ひとりにマッチ箱を渡す。マッチ棒との悪戦苦闘が始まる。ようやく付いた火を集めた薪に付ける。生木や青い葉っぱは燃えない。子どもたちの顔が変わって、心が動く。「どうして?」「悔しい」「こうしたらどう?」子どもたちは、遊びの中で考え、気づき、学び、生活の力をつけていく。

橋本さんたちは、子どもの心が育つのは、子ども自身が作りだし、体験し、心動かした遊びの中にあることを確信している。「想いを共にする市内のいろいろな地域の仲間たちと、子どもたちがゆっくり体験しながら育つ“プレイパーク”を広げていきたい」。

※プレイパーク開催日は、各プレイパークによって異なる。